

第35回 協会賞 決まる

真木

第 197 号

〒260-0852
千葉市中央区青葉町
1274-14
加藤峰子方
千葉県俳句作家協会
事務局
TEL 043-225-7115

〒299-1143
君津市君津台 2-8-4
石井紀美子方
「真木」編集部
TEL 0439-52-6254

目 次

第三十五回協会賞決まる	1
協会賞受賞作品	2
第三十五回協会賞選考過程	3
新緑交流俳句会のご案内	4
合同句集第十集珠玉抄(二)	5
千葉県俳壇ニュース、結社賞	6
ひろば、会員著書紹介	7
井上信子氏逝去、第63回千葉県俳句大会のご案内、受贈誌より	8
千葉県俳句作家協会運営基金のお願い、事務局日誌	9

俳壇には俳人協会・現代俳句協会・伝統俳句協会の全国組織の三団体があり、殆どの結社・俳人はその団体に所属し、活躍を続けている。県内の文化の向上の一助となるべく、お互いの主張を理解し、交流を図りたいと千葉県俳句作家協会は活動の場を広げてきた。その一つに「協会賞」がある。毎年、協会所属作家の二十句を一篇とした作品を募集し、審査員の選考を経て受賞者が決まる。本年度も昨年十二月十五日に応募を締め、応募十七篇の氏名を伏せ、別記八名の審査員に選考を委託、二月十一日に最終選考会を開催。熱の籠った真摯な討論を交わし、本年度の「第35回千葉県俳句作家協会賞」が決まった。その過程は後述の「選考過程」をお読み下されば幸甚である。

本賞は県内作家の資質の向上、県民文化の振興を意図した文芸賞。多くの応募者の熱意と平素の研鑽に大きな拍手を送りたい。協会賞他の受賞作家は一つのステップを越された。これを機に更なる研鑽を重ねられ大きな作家に育ってほしいと期待を深めている。協会としても各俳句総合誌への働きかけ等のお力添えを重ねてゆく所存である。

贈賞式は五月十六日(日)の通常総会を予定していたが、新型コロナウイルス禍で休会となり、発表は四月発行の「真木」紙上、表彰は秋の俳句大会にて行う予定である。

来期第36回協会賞に、更に多くの会員諸氏の力作をお寄せ下さるようお願いつてやまない。

協会賞 「日照雨」 吉岡 麻琴 (千葉市)
 次席 「道」 森 祐司 (松戸市)
 佳作 「十二月」 関戸 信治 (世田谷区)

(審査員 塩野谷 仁)

審 査 員

秋 尾 敏
 川 合 憲 子
 三 枝 かずを
 塩野谷 仁
 田 所 節 子
 能 村 研 三
 増 成 栗 人
 村 上 喜代子



協会賞選考会

協 会 賞



吉岡麻琴(千葉市)

「日照雨」

短夜の波音の消す雨の音
歌枕尋ぬる旅の緑雨かな
岬鼻の一本松や夏怒涛
津波あと著き高さに百合の花
白百合の勿来の関を通りけり
大洋を借景にして朝涼し
朝虹の磯の松原とほりやんせ
涼風や黒目がちなる療養馬
散松葉雨情生家の庭雀
書院窓明かり素秋の文机
絵筆には山羊馬たぬき夏盛ん
天津への二里の山道夏の霧
寺町の早起き暮らし草の花
朝顔や暮らしに山の水引いて
日照雨きらきらほうせんか弾けたり
秋暑し鴉の銜ふ光りもの
手の平を反らす仁王にかなかな
ひと駅を歩き芒を持ち帰る
気がかりのありて夜長のアップルテイ
壊さるる百年の家青木の实

協会賞 次席

道

森 祐司

ゆるやかに人歩み来て吾亦紅
鴨の渡りの軌跡火の恋し
柚子を挽ぐ梯子そのまま暮れてをり
憶千の黙より生まれ星流る
行く秋の切株に座し残る道
青面金剛に凜来てゐたり
初冬の里には里の掲示板
踏みしめる小石の温み十三夜
神留守の消防団の点呼かな
紅葉散り隠れん坊の鬼は誰
不動尊の眸のらんらんと日の短
大笹に売らるる野菜しぐれけり
星一つ埋み残して冬の暁
境内を掃く人の息白く白く
咽飴のLメントール花八手
木菟の夜の集会の波乱なくはなし
入母屋の屋根黒々と十二月
すれ違ふ人に目礼枯木立
振り返る道に焚火の匂ひかな
文を出し二度と戻らぬ冬日差

協会賞 佳作

十一月 関戸 信治

指葉して秋風を聞いてをり
 髭を剃る今日か明日に小鳥来る
 城址に敵の布陣凶木の実落つ
 一人夜の種無し柿のものたらず
 新走いかにもと言ふ顔揃ふ
 世事疎く生きて無敵の冬帽子
 遮断機の向かうも一人冬の月
 影からも人の出て来る酉の市
 口中に七味のほてり酉の市
 妻にまた言ひ負け冬日に凭り掛る
 手の窪に風の重さや十二月
 閉店の修羅の一行十二月
 吸へば息吐けば吐息の十二月
 十二月問診表のペンに紐
 銃眼の視野ごとごとく枯野かな
 猪鍋の底なる修羅を掬いけり
 葉喰いみな一癖と言ふ病
 青空に雪の嶺々村滅ぶ
 風呂吹きや村には駅が二つある
 丸葉の転がる先の冬の闇

第三十五回協会賞選考過程

協会賞の最終選考会は、二月十一日午前九時より、千葉市の「千葉市民会館」四階第二会議室において、審査員六名（三枝委員、村上委員は健康上の理由のため欠席）により、能村会長を選考委員長として開催された。

応募作品の締め切りは昨年十二月十五日であったが、その後直ちに各選考委員による予備審査を行い、その評価を集約した選考資料を作成し最終選考会を迎えた。

選考会では先ず選考基準等を確認した後、予備審査の結果を参考に慎重な審議が行われ、別表の通り三作品の授賞を決定した。（文中敬称略）

今回の応募作品はコロナ禍の影響もあってか、例年より少なく十七篇であった。作品は、到着順に「耕やし」浜辺功、「龍天に昇る」金子衛、「春から夏へ」藤井元基、「春の詩」金子日出子、「試歩の杖」山内洋光、「石山の秋月」大久保文夫、「大空を開封」八川信也、「風」高橋敏夫、「豊かさ」有田川あき、「道」森祐司、「十二月」関戸信治、「荷風」平山武彦、「家族農業」齋藤陽子、「俳句史」東國人、「日照雨」吉岡麻琴、「柚の夕紅葉」山岸明子、「狐火」古谷誠司であった。

予備審査における得点順位を見ると、「日照雨」23点、「道」22点、「十二月」21点、「柚の夕紅葉」13点、「風」と「荷風」が9点、「試歩の杖」7点、「家族農業」6点、「豊かさに」4点、「石山の秋月」3点、「狐火」2点、「春の詩」1点であり、無得点作品が5篇ということであった。

これらの得点・順位を踏まえて得点上位の作品から協会賞選考の審議に入ることになった。以下、

各作品についての審議の様子を纏めてみる。

上位三作品の得点差は1点であったが、先ず一位の「日照雨」、四人が一位に採っている。客観的にみて最も無難な作品という評価、旅吟を通しての诗情に惹かれた、全体に揃っていて大きな崩れはなく好感の持てる句が多かった。反面、パンチ力は感じられない、あまりにもサラツとしている、という意見もあったが特に欠点はないとした。「涼風や…」「朝顔や…」「日照雨…」「手の平を…」などが佳句としてあげられた。

次に「道」について。この作品は、一位に二名、二位に一名の委員が採った。平明な表現ながら诗情があり丁寧に詠まれ、生き方が感じられた。新しいものを出そうという意欲も見えるが句材がやや古く感じられた、季語の使い方は良くできていて、といった評価があったほか、後半作品に少し弱みが見えるという意見も出された。「柚子を挽く…」「神留守の…」「大策に…」「星一つ…」「振り返る…」等が佳句。

続いて一位に採る者はなかったものの、二位が二名、三位が三名と万遍なく得点の入った「十二月」。良い句もあれば採れない句もあり、全体として句にバラツキがある、良い素材を捉えながら消化しきれていない句が多く惜しい、また、旧仮名の作品としながら新仮名遣いが混在していたのは残念であった、などの意見が出された。「指葉して…」「城址に…」「一人夜の…」「影からも…」「銃眼の…」などが佳句。

続く得点順位の作品では、二名が二位に推した「柚の夕紅葉」。表現は平明で诗情豊か、詩に溺れていない、句も纏まっついてリズム感があった。ここで基準を踏まえての最終判定に入り、上位

作品について、合計得点差を離れて協会賞とする程の理由は見つからないということから、この得点順位に従って賞を決定すること、また、今回は応募作品が十七篇と例年より少なかったため、佳作は一作品とすることなど、満場一致で決定した。続いて得点は得たが基準により選外となった作品について、予備審査での短評を記しておきたい。

「風」：新素材への意欲が感じられた、纏まっているが弱い。「荷風」：季語との取り合わせの巧さ、詩情があった。「日照雨」「杣の」：作品に比べやや粗雑。「試歩の杖」：佳句が多く入院体験の実、病床が自然に詠まれていて、テーマがはっきりしていた。「家族農業」：気楽に作られていて素朴さは買いたい。「豊かさ」：典型的・抽象的な句が多い。「石山の秋月」：琵琶湖の句、よく解るがやや平板。固有名詞の使用に注意。「狐火」：作風が一定しないが、新しい句材への挑戦も見えて好感を持てた。「春の詩」：リズムミカルな句群で楽しい。ずば抜けた佳句はなかった。

(染谷 卓記)

★協会賞選考基準

- ①委員の半数以上が五位以内に推薦した作品であること。
- ②委員の一人以上が一位に推した作品であること。
- ③右の①②の条件を満たしていることを基準とするが、場合によっては①②のいずれかに該当していれば審議の対象とする。

第35回 協会賞入賞作品審査表

(応募作品 17篇)

番号	表題	成績	審査員査定順位							得点	作者名	住所	所属結社
			2	1		3	4	1	3				
10	道	次席	2	1		3	4	1	3	22	森 祐司	松戸市	鴻
11	十二月	佳作	3	4	4	2	3	3		21	関戸 信治	世田谷区	いには
15	日照雨	協会賞	1	3	1				1	23	吉岡 麻琴	千葉市	いには
審査員 (50音順)			秋尾 敏	川合 憲子	三枝かずを	塩野谷 仁	田所 節子	能村 研三	増成 栗人	村上喜代子	【採点】 1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点		

新緑交流俳句会のご案内

今年度も通常総会等の中止に伴い新緑交流俳句会・懇親会は中止となりました。代りに昨年度と同じ文音俳句会を開催します。投句・選句などはすべて自宅で行える通信句会とします。皆さまぜひご参加ください。

記

投句 一人二句 (別添の投句用紙を使用)
投句料 千円 (投句用紙に同封)
投句締切 五月十五日

選句 投句をした方には、選句稿を送付しますので、選句を同封の葉書に書き返送
賞品 二十位まで・役員特選(クオカード)
発表 「真木」(七月発行)にて発表
(入賞者には賞品を送付)

投句先 〒278-0037 野田市野田八一 倉岡けい方
千葉県俳句作家協会新緑交流俳句会係
問合せ 新緑交流俳句会担当 松本よし彦
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台8-22-2-101
電話 〇四三-二五五) 七四四〇

二〇二二年四月吉日
千葉県俳句作家協会
会長 能村 研三

以上

千葉県俳句作家協会 合同句集 第十集珠玉抄(二)

会長 能村研三 選

力作の全紙の余白涼気かな	上田 玲子	ハンモックに重過ぎまいか夜のバツハ	木之下みゆき	雨ごとに透けゆく木立冬隣	髙田二三夫
田仕舞の人影のなき煙かな	内田 歩	太陽の色海の色目刺買ふ	木村秋草子	山車十基気風は今も江戸まさり	清水佑実子
瞬の冬日讚美歌降りてくるごとし	内山 花葉	七十年戦なき国鏡餅	楠原 幹子	告白も懺悔もありて寒つばき	清水 伶
いい人でゐる疲れかなアマリリス	宇根 幸子	鶏頭花真ん中にある飢餓大陸	倉岡 けい	謂れあり片葉の葦のしげりかな	下平 誠子
滝音の奥へ奥へと風蒼む	梅澤 光子	冬に入る川の流速日の暮れも	栗坪 和子	清冽な音聴く先の犬ぶぐり	白鳥 青陽
ラ・フランスなりのバランス夕日中	梅津 紀子	背伸びせぬ幸せもあり福寿草	栗原 公子	青林檎加へ盛籠とのひぬ	城本美寿々
傘寿まだ遊び盛りよほととぎす	大久保文夫	日の暮れは木の実に戻る木の実独楽	黒澤 雅代	初風の海相舞のこうのとりの	末廣 陽恵
一雨にぬれたる草の紅葉かな	尾形 和子	望郷と言ふ色のある山ざくら	郡 かおり	風花す植輪に睫毛らしきもの	杉山眞佐子
宙に噴く光と力柿若葉	小河原清江	海へ向く木椅子一脚秋の暮	後藤 輪子	元日や思いを馳せる我がルートツ	鋤柄 直紀
灯すほど闇の濃くなる山車囃子	奥村 利夫	水底の青の弾力しゃぼん玉	小林 俊子	白髪のはのと白夜の駅ピアノ	鈴木真沙枝
転んでもこの道を行く花吹雪	小野 功	この星のおほかたは海鷹の翔つ	小林 良作	大寺の黙のみ込んで秋開ける	須田眞里子
風呂吹やいつか一人と言ふ二人	小野 正之	少年は夢の魂冬林檎	齋藤 一子	安房素秋立てば揺れたる渡し舟	須藤 義紀
今はまだ旅の途中よ浮寝鳥	小見 恭子	平成を筍飯で締めくくる	齊藤るりこ	白樟の貴婦人のごと秋澄めり	須山 登
秋の川ときに競り合ひ光り合ひ	香川 綾	もう春を待つてゐられぬ野の光	三枝かずを	爽やかや伊八の彫りの省きなし	関戸 信治
今日からは初冬の手といふ鼓動	加藤 峰子	白葉女の仮身か路地の濃紫陽花	三枝 青雲	伊能図のままの岬を鳥渡る	染谷 卓
おばあちゃんお帰りのさい門火焚く	金澤 恵子	葡萄一房過ぎし日の重さかな	酒井園づみ	大いなる闇を背に負ひ虫を売る	高木 一恵
台風一過大停電の房の国	金子日出子	日の本の忠敬銅像夏羽織	坂本 節子	令和山水未生のひびき皁月野に	高橋 健文
ひらがなの性の妻なり黄水仙	金光 浩彰	どこまでが嘘かほんとか浮いてこい	坂本 茉莉	虫籠にある白昼といふ時間	高橋 富久江
土筆野や遙かな楕円形の海	鎌田 光恵	慟哭は歳月にあり返り花	坂本 正夫	どれみどれみと春の風吹く付け睫毛	高橋美智子
帰らざる日々は水色貝風鈴	川合 憲子	一人とはこんなに自由水澄めり	佐々木テル子	良きことも空高く焚く古曆	高橋 道子
翠黛の筑波嶺はるか梨の花	川上 進也	風呂敷の結び様々文化の日	佐々木リサ	皆そつぽ向きたる写真あたたかし	滝口 滋子
新元号に我が名一字や桜満つ	川崎 和子	がむしやらに跳ぶ子駆ける子木の根明く	佐藤 映二	みちのくへみちのくへ山滴れり	滝沢まり子
日射し燦微風に揺るる稲の花	川崎 直子	雪もよひ魁夷ブルーとなりにけり	里村 梨邨	章駄天の秋の日暮れは鎌足と	武田 和郎
金風の長狭街道長狭米	川俣婦美子	寒の木のうしろも百の寒の木々	塩野谷 仁	瀧きこまれまたの世の色返り花	多胡たかし
薔薇真紅別の生き方など思ひ	菊地 光子	余白とは心のゆとり冬ぬくし	重城 彌生	炉語りの声低きとき恐ろしき	田崎多美子
花辛夷風の行手の筑波山	北川 昭久	老禅師の短きことば水の秋	重田 忠雄	歳時記はわたしの聖書秋ともし	田所 節子
口笛を吹かうか春の遠江	北村 操	冬木の芽百年先に咲かず花	志田佐代子	飛魚の鋼細工の翹ひらく	谷本 元子
ぢつとしてゐたる命の糸とんぼ	衣笠 卓彦	崩し字が薄雲になる初夏の朝	柴田 歌子	白鳥来ガラスのやうな風まとひ	茶谷 静子

(次号へ続く)

千葉県俳壇ニユース

令和二年度

千葉市民春の俳句大会

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、第五十回千葉市民芸術祭は来年に延期。三月七日(日)の大会・於市民会館も新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止と決定。表題のように名称を変更し、「兼題の部」のみの実施になりました。

兼題入賞者(○内は順位)

千葉市長賞

鼻の啼くから森が深くなる

石橋みちこ

千葉市議会議長賞

霜柱踏めば子供の頃の音

高橋 光枝

千葉市教育長賞

象だか河馬だか着膨れが動き出す

細野 一敏

千葉日報社賞

下駄履きの民正委員爽やかに

大越 葉子

千葉市観光協会賞

不器用な告白のやう笹子鳴く

加藤 峰子

千葉市文化連盟会長賞

十二月八日東京の交差点

廣川やよい

千葉市俳句作家協会会長賞

海籠そつと置きたるやうな島

伊藤 明美

⑧ 木守柿村は出てゆく道ばかり

徳吉洋二郎

⑨ 少年は雲に少女は向日葵に

尾形 誠山

⑩ 寒夕焼どこかにぎつとある出口

石井紀美子

⑪ われの顔映し代田を仕上げけり

坂本 正夫

⑫ 春雷や訪はねば人の遠くなり

福嶋 卓爾

⑬ 笑ふたび生えくる乳歯若葉風

山下 民子

⑭ 濡れ縁の虎刈り床屋花八つ手

大沼田 昭

⑮ 日脚伸ぶ玉虫色の鳩の首

原 瞳子

(昼間たつお報)

我孫子市文化連盟「結成五十周年記念」刊行

染谷卓氏・特別功労を受賞

我孫子市文化連盟は令和三年四月十六日をもって結成五十周年を迎える。それに先立ち一月に記念誌『結成五十周年記念』を刊行した。慶祝。なお、五十周年記念にあたり、当協会の理事で「あびこ」代表の染谷卓氏が、文化連盟・所属団体(我孫子市俳句連盟)における功績等で、特別功労を受賞された。(『結成五十周年記念』より)

「ろんど」誌三五〇号記念発行

すぎき巴里主宰の「ろんど」は、本年二月号をもって三五〇号に達した。慶祝。これを記念して、ろんど三五〇号記念コンクール入賞作品を発表。俳句の部のみ紹介する。

鳥居おさむ賞「奈良春秋」池端英子

英子

大仏の天窓開く大旦

英子

同賞次席「霞こぼし」伊藤訓子

訓子

小鳥来るマトリョーシカの玉手箱

訓子

(「ろんど」二月号より)

「いには」誌一五〇号記念号発行

村上喜代子主宰の「いには」は、本年三月号をもって一五〇号に達し、同号を記念号として発行した。慶祝。記念特集として、一五〇号記念俳句コンクール受賞作品を発表した。

最優秀賞「泥鰌鳴く」松澤健治

健治

手の中の泥鰌鳴きたる終戦日

健治

二席「ホロホロ岳」今 雅子

雅子

照り翳るホロホロ岳や秋の声

雅子

三席「旅心」小見恭子

恭子

(「いには」三月号より)

結社賞

令和二年度「野火」三賞

野火賞 萩原敏子

敏子

日傘よりはみ出す腕の白さかな

敏子

新人賞 糸澤由布子

由布子

黒猫の見てゐる先の秋夕焼

由布子

青霧賞 村山靖子

靖子

回診を待つや春待つ顔をして

(「野火」一月号より)

令和二年度鳴賞・新人賞

鳴賞 原田達夫・松林依子

達夫

一刷毛の日に初霜の潤みたり

依子

サルトルの憩ひしカフエ柘榴の実

依子

新人賞 山内洋光

洋光

蛇の衣昨日を捨てた形かな

(「鳴」一・二月号より)

第二十七回鳳声賞・百鳥賞

鳳声賞 平野きらら・平田倫子・鍛形ゆきこ
 風害の木に大鷹の身じろがず きらら
 つちふるや火宅の人の果てし島 倫子
 メコン川渡る心地のハンモック ゆきこ
 百鳥賞 富迫 翠
 倒れつつボールを繋ぐラガーかな 翠
 (百鳥) 一・二月号より)

いには同人賞・いには賞

いには同人賞(第十一回) 伊藤泰子 泰子
 室の花沖の怒濤を遙かにす
 いには賞(第十五回) 橋内訓子・佐藤美智子 訓子
 ブレーキのやうに靴底鳴りて冬 美智子
 孫悟空のやうに飛びたし涅槃西風 (ふには) 二月号より)

令和二年度「夏日」特別作品入賞(一席〜五席)

物影の延びる九月となりけり 間部美智子
 天命に腹を括りて秋の暮 北村 綾
 陶椅子の藍の文様夕涼し 丸澤 孝子
 朝寒の空を吸ひこむ鯉の口 渡辺 紀子
 蟻螂の大見栄切りしまま枯れて 井川 美江
 (夏日) 三六八号より)

令和三年度「雑草」各賞

雑草賞 大木黄秀 黄秀
 職退きて明るき庭や冬に入る
 新人賞 星野佳代 佳代
 横文字の銀座二丁目冬日和 (雑草) 三月号より)

ひろば

横芝光俳句会紹介

県内俳句協会・俳句連盟紹介
横芝光町文化協会

横芝駅にほど近い栗山川に架かる栗山橋の横芝側河畔に、明和七年(一七七〇年)創業の老舗「小田部屋」があった。その第八代当主土屋源吾さんは(明治三十七年生)平成十四年没)俳句を栗水と称し、家業の傍ら若くして俳句に勤しみ、近郷近在の俳人たちと交わり、先の大戦後、地元俳句会「栗江会」を再興した。そして、昭和二十五年、俳誌「栗江」を創刊し、多くの新進を育成したことなどから、当町の俳句は一時隆盛を極めた。また、栗水さんは

千葉県俳句作家協会の会員でもあった。

この「栗江会」は、栗水さん亡き後、山口一秋さんを主宰として継続してきたが、やがて、同氏の逝去とともに自然消滅し、その後、「ひこばえ俳句会」「敬愛俳句会」が、渡部和秋さん・小松博さんの指導により続けられてきた。

現在は、十数年前から発足した「横芝光俳句会」が、毎月第四火曜日・文化会館で、当季雑詠五句出し・特選一句を含む五句選での披露・合評と小人数ならではの句会を楽しんでいる。句会の作品は、町の広報の文芸欄に毎月掲載しているほか、文化祭での展示や、横芝駅の待合室に季節ごとに展示替えをして、俳句への興味を喚起し、「俳句ある人生」を楽しんでもらえればと思っている。(横芝光俳句会会長 藤田考成記)

会員著書紹介

●『能村登四郎の百句』

能村研三 著
 本誌には「老いてなお華やぐ」という素敵なサブタイトルが付く。当協会会長、「沖」主宰の著者が、前主宰で父である能村登四郎の百句を取り上げ、全句を鑑賞する。市川市在住。俳人協会理事、国際俳句交流協会副会長、日本文藝家協会会員、日本ペンクラブ会員。句集『鷹の木』(俳人協会新人賞受賞)、『肩の稜線』『催花の雷』他。(令和3年1月発行・ふらんす堂)

●句集『遍舟』

荒木 甫 著
 当協会の参与、「鳴」編集長の著者の第一句集で三六一句を収載。序を高橋道子代表、帯文は大石悦子氏が寄す。柏市在住。「鳴」賞受賞、俳人協会会員、NHK文化センター柏教室俳句講師。国といふ大いなる關稅申告
 あのころは父に母居て若荷汁
 老鶯や先端科学研究所
 (令和3年2月発行・ウエップ)

●句集『九州男児』

徳吉洋二郎 著
 千葉県現代俳句協会幹事長を務める著者の第一句集で三四〇句を収載。「響焰」を経て「ペガサス」創刊同人。同協会会長並木邑人氏が十四頁に及ぶ跋文を。千葉市在住。響焰「白灯賞」受賞。全国俳誌協会会員、イオンカルチャー俳句講座講師。三月の蛇口昭和の火の匂い
 納豆汁我は九州男児なり
 夏来る水平線を引き直し
 (令和3年3月発行・文學の森)

井上信子氏逝去(享年九十四歳)

荒木 甫

井上信子師は教職中の伊藤白潮先生の下でPTA活動の句会として俳句を始められた。昭和五十年の「鳴」復刊と同時に参加、第一号の巻頭句を飾られ以後、「鳴」の主要同人として活躍して来られた。平成二十年、伊藤白潮師の急逝あと八十二歳の高齢で代表に就任。二十三年、選句を高橋道子選者に任せ作品のみ発表。同二十九年に代表を退任された。「鳴」の中では最古参であり、句会もほとんど本部句会のみ参加でいくらか近寄りたく、多くの同人にとっては高くて遠い存在だった。本部句会では、確りとした口調的確に時に鋭く鑑賞批評をされた。「鳴俳句」の「選後余録」は簡潔明解に、リズム感のある筆致で、楽しく読めた。しかし、これは師の体調不良のため二年間ばかりのことで悔いが残る。巻頭作品は退任まで全うされた。句集は『力紅』(昭和六十年刊)。力紅は作者の造語。次の一句から。
十葉の茎の岐れの力紅
みずみずしい感覚と的確な把握。対象をいとおしみながら、包み込むような作風と、故白潮師の言葉である。晩年の句を三句。
芦刈のたとへば去りし後の空
春深し抱き合うて来る山と川
母が来て寄せてゆきたる春落葉

第63回 千葉県俳句大会 ご案内

- 募集作品 一般の部
雑詠 2句1組 (投句作品は、自作で未発表のものに限ります。投句は何組でも可で、組単位に採点、授賞致します)
応募資格 千葉県内を俳句の活動拠点とされている方。
締切 令和3年7月17日(土)(当日消印有効)
出句料 一組 1,000円 投稿に添付(なるべく定額小為替をお願いします)
送付先 〒276-0042 八千代市ゆりのき台3-4エルプレシア1101 前北かおる方
千葉県俳句大会・一般の部事務局 (携帯 090-4363-3501)
特別選者(記念講演あり) 今井 聖(俳誌「街」主宰・俳人協会理事)
募集作品 ジュニアの部
雑詠 1句(投句作品は、自作で未発表のものに限ります)
応募資格 千葉県の小・中学校に在籍の児童・生徒
締切 令和3年7月31日(土)(当日消印有効)
送付先 無料
〒270-0007 松戸市中金杉2-78 高橋健文方
千葉県俳句大会・ジュニアの部事務局 (電話 047-713-6495)

受贈誌より(前号より続き)

- 響焰(二月号) 揺れながらこころと体冬至粥 米田 規子
草の実(二月号) 洋菜のパセリを加へ七草粥 逸見 真三
原人(一月号) 心音のつまづいてより日短か 昼間たつお
鴻(二月号) レノ忌を冬の渚に遊びけり 増成 栗人
好日(二月号) 後の世の目覚め梟の羽音 高橋 健文
雑草(二月号) 猿酒に酔いたる夢や年新た 実 繁
鳴(二月号) 冬夕焼マチスの赤と競ふかに 高橋 道子
軸(二月号) 細る街灯無人の遠近法寒し 秋尾 敏
瀬祭(二月号) いさり火の尖る沖より寒波くる 本田 攝子
夏日(三六九号) 句に依りし半生室の花咲かす 望月 百代
野火(二月号) 雑木山向うが見えて冬に入る 菅野 孝夫
初蝶(二月号) 退院やポインセチアの緋へかがむ 中山 和子
万象(二月号) 十一月三島の本が平積み 内海 良太
ペガサス(九号) ふうせんかすら異端の風となら遊ぶ 羽村美和子
百鳥(二月号) 北斎の浪初富士を呑み込めり 大串 章

遊牧 (一一三〇号)	蕎麦咲くとつくづく石蹴り石遠し	塩野谷 仁
ろんど (一一二〇号)	ホットレモン濃く透明になりたき日	すずき巴里
あびこ (一一五三三号)	夕星を負ひつ初冬の歩としたり	染谷 卓
いには (一一三〇号)	受けし恩たれかに返す寒の梅	村上喜代子
浮巢 (三月号)	鴨帰るひたすら父の恋しき日	大木さつき
沖 (三月号)	初苔海鵜十字の翼張る	能村 研三
音信 (三月号)	梅見月更級日記の旅を追ふ	白鳥紅星子
かずさホトトギス (六一九号)	初富士を大きく見せて夕映ゆる	三枝かずを
響焰 (三月号)	ハッピーバースデイ冬の檸檬灯る	米田 規子
草の実 (三月号)	産声の牛舎に充つや春隣	逸見 真三
原人 (三月号)	セピア色の一番電車二月果つ	昼間たつお
鴻 (三月号)	一月一日居る筈のなき妻の席	増成 栗人
好日 (三月号)	梟の振り向きざまの落暉かな	高橋 健文
雑草 (三月号)	風花の峰徐ろにアニミズム	実粉 繁
鴨 (三月号)	朗報を謝しつつたたむ冬紅葉	高橋 道子
軸 (三月号)	人類癒えよ銀河に年の豆を打つ	秋尾 敏
獺祭 (三月号)	花街に飼はれ密かに恋の猫	本田 攝子

夏日 (三二七〇号)	ざくざくと砂利道を来る寒さかな	望月 百代
野火 (三月号)	人体の半分冬の日が当たる	菅野 孝夫
初蝶 (三月号)	毛蟹旨し今更ひとの怖ろしき	中山 和子
万象 (三月号)	カミユの忌の近し綿虫よく飛んで	内海 良太
百鳥 (三月号)	鷹の影上げ始祖鳥思ひけり	大串 章
遊牧 (一一三二一〇号)	またひとつたましいもどる冬の山	塩野谷 仁
ろんど (三月号)	あたたかく雪積むことも喪正月	すずき巴里

**千葉県俳句作家協会
運営基金のお願い**

千葉県俳句作家協会のさらなる発展のため、運営基金を募集致します。皆様の積極的な協力をお願い申し上げます。

◇ 一口 一千元

◇ 送付先 千葉県俳句作家協会基金口座
郵便振替 〇〇一四〇〇一七九二〇八三

基金にご協力頂いた方のご芳名を会報「真木」に記し領収に替えさせていただきます。

基金御礼 (令和三年三月二十日現在)

小倉 英男 磯部 香(洋子) 下鉢 清子
村上喜代子 増田 善昭 秋尾 敏

(以上合計 三十二口 六万四千元)

★年会費納入のお願い

年会費(三千元)は前納です。協会の円滑な運営のため、まだ納入されていない方はお早めの納入をお願い致します。

年会費送付先 千葉県俳句作家協会
郵便振替口座 〇〇一五〇一六―三五三四四

★広告募集のお知らせ

「真木」に掲載の広告を募集します。お申込みお問合せは左記へお願い致します。

千代市ゆりのき台三―四エルブレンシア二〇一
千葉県俳句作家協会・広報部 前北かおる 宛
電話 〇四七―七五〇―一四五五

事務局日誌

◆第五回理事会(出席者20名)

日時 令和3年2月11日(木) 10時30分から11時30分
会場 千葉市民会館 3階特別会議室2

議事

- 1 令和2年度新春交流俳句会について
- 2 第6回千葉県俳句大賞について
- 3 第35回千葉県俳句作家協会賞について
- 4 令和3年度千葉県俳句大会について
- 5 令和3年度秋季吟行会について
- 6 令和3年度新緑交流俳句会について
- 7 会報「真木」一九七号について
- 8 その他 事務局報告

編集後記

・本号に協会賞受賞作品を紹介しました。慶祝作品は応募されたままの表記になっています。

・運営基金のお願いと、二件のご案内を同封致しました。皆様のご協力をお願い申し上げます。(紀)

俳誌 **あびこ** 主宰 染谷 卓

誌代(隔月刊) 一年 四〇〇〇円

〒270-1138 我孫子市下ケ戸二八五

TEL 〇四一七二八二一四四四一

郵振替 〇〇一〇〇一四一八八九〇七四

あびこ俳句同好会

一度きりの今を楽しむ

いには

主宰 村上喜代子

新会員歓迎・添削指導します。

誌代 1年 12,000円(月刊)
半年 6,000円 見本誌 500円

— いには俳句会 —

〒276-0036
千葉県八千代市高津 390-211
電話 047-458-1919
Fax 047-458-1895
振替 00280-9-131469
HP検索: いには俳句会

現代俳句同人誌

遊牧 代表 塩野谷 仁

同人費 一年 二〇〇〇〇円
誌友費 一年 六〇〇〇〇円

〒273-0033 船橋市本郷町五〇七二一三〇七

遊牧俳句会

電話 〇四七二二六六一〇八一
FAX 〇四七二二五七七三三八

歩いて俳句

あま

創刊 鳥居三朗
師系 今井杏太郎

主宰 飯田 晴

〒276-0023 八千代市勝田台一七七一

電話 & FAX 〇四七・四八七・七二二七

雲発行所

心を満たす俳句

鴻 koh

「鴻」俳句会

発行所 〒271-0087 松戸市三矢小台二四一六谷口方
電話 〇四七三三六三四五〇八
FAX 〇四七三三六六一五一一〇

◆誌代/年間 二一,〇〇〇円

主宰 増成栗人
師系 角川源義 吉田鴻司



人間の総量を

鳴

代表 高橋道子
創刊 田中午次郎
再刊 伊藤白潮

誌代 一ヶ月 一,〇〇〇円(送料共)
一年 一二,〇〇〇円

〒277-0827 柏市松葉町四七二二一三〇五
荒木甫方 鳴発行所

電話 〇四七二二七六三二
振替 〇〇一八〇一四一六一五七二二
<http://shigei-haikukai.com/>

月刊 **夏目**

のびやかに自分史としての俳句を作る

主宰 望月百代

誌代(送料共) 半年 六,〇〇〇円
一年 一二,〇〇〇円

〒270-0034 松戸市新松戸七二二三

夏目発行所

FAX 047-345-6351
振替 〇〇一三〇一八一一一〇九六

月刊俳誌

沖 (おき)

俳句ルネッサンス

主宰 能村 研三

新会員募集中

誌代 1年/15,600円
半年/7,800円
見本誌 1冊 800円

沖発行所

〒272-0021 市川市八幡6-16-19
TEL 047-334-4975
FAX 047-333-3051
振替 00170-6-161552

創刊 50周年

軸

軸俳句会

主宰 秋尾 敏

〒278-0005 野田市宮崎 95-4
電話 04-7122-3921
Fax 050-5552-9110
84円切手3枚で見本誌贈呈